発行所　社会福祉法人全国社会福祉協議会　昭和52年11月12日第三種郵便物認可

ボランティア・市民活動のコーディネーター・リーダー等推進者のための

ボランティア情報

【volunteer_information】

2012 JULY 7
VOL.422
平成24年7月1日発行 毎月1回1日発行

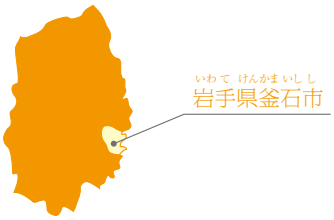
いわてGINGA-NETプロジェクト、200人を超えた第6期の集合写真

特集 ボラフェスみえに行こう！～三重からみえる 未来の絆～ 02

Contents

ホントは身近なボランティア
北九州市小倉南区合馬校区 …… 06
突撃訪問！
隣のコーディネーター
（日本伝統文化コーディネーター）
帰ってきた！
あるある質問コーナー …… 07
保険の広場
つながって広げ続けよう！
事務局だより …… 08

今月の鼓動



岩手県「いわてGINGA-NET」

若いエネルギーで町を元気に。学生発のボランティア活動支援

「全国から集まってくれる学生の活動のコーディネートを学生発でやりたかった」と話すのは代表の八重樫綾子さん。

「夏銀河２０１２」と名付けられたプロジェクトでは、岩手県内外から7期各１００名ずつ、合計７００名の学生を募ります。

５～10名の小グループに分け、コミュニケーションを重視した仮設住宅でのサロンや学習支援・イベント支援などに、これまでの出会いや経験年数も考慮しながら丁寧にコーディネートします。

「学生には気構えなく話してくださる方も多いようです」と八重樫さん。釜石市を中心とする活動の６日間では、問題意識や想いの元で動くことができるよう、毎日必ずふりかえる機会を持ち、話の中で出てきた困りごとは社協などにつないでいるとのこと。

今年の夏銀河もあっという間に満員御礼。今夏も学生の元気な声が響きます。

●取材日／２０１２年６月29日

「いわてGINGA-NET」
いわてGINGA-NET
http://www.iwateginga.net/

避難所や応急仮設住宅で暮らす数多くの避難者の方の生活を、長期的な視野で支援することを目的とした学生プロジェクト。

被災地の要支援ニーズと学生のボランティアニーズを効果的に結びつけるために、岩手県立大学、社会福祉協議会と、県外のＮＰＯが連携し、運営している。

独自にコミュニティ支援力養成研修会を開催するなど、ボランティアコーディネーターの育成にも精力的。

ふれあい学びネットワーク
社会福祉法人 全国社会福祉協議会

特集

ボラフェスみえに行こう!

～三重からみえる　未来の絆～

「全国ボランティアフェスティバル」は、ボランティア・市民活動に関する情報交換や実践交流、啓発等により、全国および開催地域の活動を一層高めるために、1992年以降毎年各地で開催してきたところです。

今月号の特集では、「第21回全国ボランティアフェスティバルみえ」開催にちなみ、三重県におけるボランティア・市民活動の事例を紹介します。

第21回全国ボランティアフェスティバル実行委員長
川瀬みち代 氏

今年の9月29・30日、三重県津市をメイン会場に第21回全国ボランティアフェスティバルみえを開催します。

大会テーマは「三重からみえる　未来の絆」。東日本大震災をうけ、再確認された地域社会のつながりの重要性、そこから生まれる力を三重大会から発信していきたいと考えています。

三重県では、ここ数年、ボランティア・市民活動者数は増加傾向にあり、東日本大震災を契機として、その関心は一層高まっています。

災害に関しては、ボランティア、NPO、社協、行政等の協働による「みえ災害ボランティア支援センター」があり、東日本大震災や平成23年台風12号災害の際の支援に積極的に取組みました。現在でも、東日本大震災に関する支援は継続中です。

また、三重県には外国籍住民も多く、多文化共生の分野の活動も盛んになってきていますし、まちづくり分野の先進的な取組みなども出てきています。

そして、活動者を支援するボランティアコーディネーターの養成にも力を入れており、ボランタリーな力がより発揮されるよう取組みを進めています。

一方で、全国的な課題と同様、活動者の高齢化や若い世代の活動者が増えないことなどの課題もあります。

ボラフェスみえでは、そのような課題も全国のみなさんと共有しながら、県内外の実践をお伝えするとともに、全国的な実践研究の場、学びの場となるよう願っております。

第20回全国ボランティアフェスティバル
TOKYO ふれあい広場

ここでしか得られない"気づき"や"学び"そして"出会い"がきっとあるはずです。

最後に、三重県には伊勢神宮や熊野古道をはじめとした観光スポットや、松阪牛や伊勢エビなどのグルメも豊富です。

「見てよし、食べてよし、参加してよし」の三重県で開催される第21回全国ボランティアフェスティバルみえに、ぜひご参加ください。

全体プログラム

1日目／9月29日(土)

◆オープニング　12：45～13：00
伝統芸能の雅楽で歓迎します。

◆テーマアクト　16：00～16：30
ミュージカル：人情集団An-Pon-Tan

◆開会式　13：00～13：40
主催者・来賓あいさつ
ボランティア功労者厚生労働大臣表彰など

◆交流会　17：00～18：30
参加者同士の交流を深めます。

◆テーマトーク　13：50～15：50
テーマ：三重からみえる未来の絆

2日目／9月30日(日)

◆分科会　9：00～11：45
○会場は、津市内と伊勢市内に分かれます。
○30分科会に分かれ、テーマに沿って協議・研修を行います。

同日同時間開催
◆拡大分科会［津会場］　13：00～15：00
○6拡大分科会に分かれ、さらに学びを深めます。
◆フィールドワーク［伊勢会場］13：00～15：00
○お伊勢さん観光案内人と伊勢の歴史・文化を体感できます。

◆引継式・閉会式
15：15～15：50
大会フラッグ引継、次期開催地（高知県）あいさつ　など

◆ふれあい広場
・津会場で両日開催します。（団体活動紹介・ポスターセッション等）
・伊勢会場（2日目）では、協賛イベントを開催します。

9/29(土) 13:00～　●会場●津市 三重県総合文化センター

2012

9/30(日) 9:00～　●会場●津市内および伊勢市内

主催：第21回全国ボランティアフェスティバルみえ推進委員会
三重県社会福祉協議会　「広がれボランティアの輪」連絡会議　全国社会福祉協議会

問合せ先
第21回全国ボランティアフェスティバルみえ事務局
〒514-8552 三重県津市桜橋2丁目131　三重県社会福祉協議会内
TEL 059-227-5145　FAX 059-227-6618

申し込み方法　開催要綱と申込書をホームページ（http://www.miewel-1.com/vfmie/）に掲載しますので、ダウンロードしてお申し込みください。

読者の広場

5月号を読んで、高齢化が進む中、現在ある施設の有効活用し様々な方々が関わりながらよりよいものにしているところや、その仕掛けを社協が行っているところがいいなと感じました。（大阪府　高橋さん）

～三重からみえる　未来の絆～

「行けるところ」よりも「行きたいところ」へ

大切な旅の思い出づくりのお手伝いをします

三重県鳥羽市　NPO法人
伊勢志摩バリアフリーツアーセンター　野口（のぐち） あゆみさん

当事者目線でチェックした情報を発信

最近はご高齢でも元気な方が増えています。同様に、障害があっても、もっと外出したいと思われている方も多くなってきました。当NPOは障害者・高齢者の方々に伊勢志摩の観光を楽しんでいただくために、当地の宿泊、観光施設のバリアフリー情報を中心とした情報発信を進めています。

センタースタッフは4名ですが、その他、専門員と呼ばれる地元の障害のあるメンバー約20名によるバリアフリー調査員の活動は、店舗の入り口の段差やホテル利用利用者のエレベーターの実寸調査、ストレッチャーが部屋に入るかどうかまで多岐に亘ります。それらの情報を基に、お問合せいただくお客様へ旅行のアドバイスを行い、安心かつ快適な旅へと繋げます。現在、年間800件にも及ぶ相談内容に同じものはなく、「したい」旅行や要望に新鮮な気持ちで対応しています。

もともと私たちの活動のきっかけは障害のある方からの「現地に来てから実情を知ってもどうしようもできない。事前に知っていれば準備ができるのに」という言葉から。求めている人に、求められている情報を発信したいと意を新たにして、タウン誌の編集経験を活かした市民団体、そして当NPOの立ち上げに至ったのです。

住民の意識も大きく変わった

活動を始める前は、車いすで旅行する方の姿はほとんど見かけませんでした。この10年で車いす利用者もかなり旅行に来てくださるようになり、そうした姿をいつも見ている地元の人からも、バリアフリーなまちづくりの意識が芽生え始めました。

ホテル調査風景

現在、鳥羽市内の高校で「観光とバリアフリー」をテーマとした授業を受け持って6年目になります。校外でバリアフリー体験をしたり、障害当事者から実際に話を聞く内容もあります。土地柄、観光業に就く生徒も多いので、社会に出る前にバリアフリーについて知識を得てもらいたいと思って続けています。

旅は心のリハビリでもある

当NPOには「パーソナルバリアフリー基準」という尺度があります。障害の種別ではなく、その人がどこに行きたいのか、何をしたいのかを聞き取ることを徹底しているのです。障害のある人も本当にやりたいことがあれば、旅行先でいつもより少し頑張ることができます。

迎え入れる施設の方には、旅行者にとっての旅行の意味や思い出の一品、バリアをクリアするための協力依頼などを事前に観光先に伝え、旅行者と観光先を繋ぎます。私たちの役割は、いわば旅行者と観光地との通訳者といったところです。

「昔行った思い出の地を訪れたい」「最後の旅行になるかもしれない」など一人一人の大切な旅の思い出づくりのお手伝いを今後も続けていきたいと心から願っています。

〈取材日：平成24年6月27日〉

観光案内をする「駅ボラ」、ベビーカーの貸出も

読者の広場

6月号で、特集のネット広報と、身近なボランティアのコーナーのアナログな部分を読んで、ボランティアは広く周知、深く繋がる、この両面が必要なんだと実感しました。（愛知県　Sさん）

介護研修生と愛伝舎介護スタッフ

JICA（国際協力機構）が介護研修の委託先を探していた際に立候補し、介護ヘルパーの養成を行い、その後、三重県の事業で、これまで５回の介護研修を実施しました。90名が「ヘルパー2級」講座を修了し、38名が介護の仕事に就き、ほとんどは継続して働いています。

約5万人の外国籍の方が暮らす三重県

私が暮らす三重県は人口180万人。ここで約5万人の外国籍の方が生活しています。人口比率ではおよそ2.41%で、日本で３番目に外国籍の方が多い県です。日本でも有数の自動車メーカーや家電メーカーの工場があり、製造業の下請け工場で働く方が多いのが特徴です。

私が住む鈴鹿市周辺には、ブラジル人、ペルー人の方が多く、1993年から4年半をブラジルで過ごした私は、彼ら彼女たちの明るく優しい性格を知っています。製造業以外の就労の選択肢を広げたいと、着目したのが介護の領域だったのです。

2008年のリーマンショック後、2009年、

生活ガイダンスは、相互理解の場

公立学校の特別クラス（国際教室）の非常勤教師となった2002年以降は、外国籍の保護者が日本で不安定な生活をしていることを聞くことが度々ありました。セーフティネットから外れる人が増えることは、日本にとってのリスクにもなります。この問題の解決に向けて開催した、「電話通訳サービス」や「生活ガイダンス」の事業を行政に提案していきました。

生活ガイダンスでは、日本で生活するためのルールを伝えます。ゴミの分別に始まり、自治会への参加、教育ガイダンス、防災セミナー、ライフプランのアドバイスなど、日本の社会で必要なルールや情報を伝える場となっています。地域をともに創る仲間としての関係を築いてほしいと思っています。日本人と顔見知りになり、挨拶する関係になっているところもあります。

日本と世界との架け橋になりたい

私たちのNPOは2005年に発足し、現在は日本人、ブラジル人合わせて9名で活動しています。教育、職業訓練を通して、外国籍の方々が日本で自立できるように支援してきました。その甲斐あって今では、「あそこに相談すれば安心。必要なところにつないでもらえる」というイメージが定着しています。

今後の夢は、「外国人サポートセンター」のような拠点づくり。世界中から日本を選んで来た人々がこれから日本をつくる仲間となり、世界と日本をつなぐ架け橋となってくれたらうれしいです。文化の多様性を受け入れることが、日本の豊かさにつながると信じて活動しています。

〈取材日：平成24年6月27日〉

被災地支援をする日系人ボランティア

「文化の多様性を受け止めることが、日本の豊かさにつながると信じています」

三重県鈴鹿市　NPO法人　愛伝舎 理事長　坂本（さかもと） 久海子（くみこ）さん

読者の広場

「過疎」は、今後も日本中で共通の課題になるのではないかと思います。住民が活き活きと活動している事例やエンパワメントな活動など、元気の出るような活動が広がってほしいと感じました。（宮崎県　大田さん）

ボランティア情報　平成24年7月1日発行　第三種郵便物認可

「地域を自分たちで守る体制づくりの大切さを痛感しました」

三重県紀宝町　社会福祉法人
紀宝町社会福祉協議会　事務局次長
鈴木 生子（すずき しょうこ）さん

～三重からみえる 未来の絆～

「自らの身の安全は自らが守る」という目標達成のために

三重県紀宝町は東海地震、東南海・南海地震等の大規模地震が想定されるエリアです。災害時には「自らの身の安全は自らが守る」という町の方針に基づいて、平成20年に「災害見守り体制連絡協議会」を設立。これは社協、行政、民生委員・児童委員協議会の三者で協力体制を確立したものです。

実践的な組織を目ざし、当協議会が主体となって災害ボランティアコーディネーター（以下、災害ボラコ）の育成に尽力し、住民と行政、社協職員から第1期26名、第2期20名、合計46名を育成しました。質の高い専門家による養成講座を受けていたことで、難題な問題点も冷静に対応し、被災地のニーズに向き合う力を養った災害ボラコは平時から地区の防災訓練、学校への福祉教育などの啓発活動イベントに積極的に参加しています。

台風被害でさっそく活躍した災害ボランティアコーディネーター

平成23年9月5日、日本を襲った大規模台風12号は紀宝町にも大きな被害をもたらしました。しかし、驚いたことに被災後まもなく町からも外部からもボランティアが次から次へと駆けつけてくれました。その数、延べ5,314名/42日間。社協だけではとても対応できない程の数でした。

災害ボランティアセンター

その際にも災害ボラコの活躍は大きなものでした。各地域のニーズを拾ってきてくれたり、求められているニーズに合わせて639件ものマッチングを率先して行ってくれました。

家屋からの土砂出し、家財の運搬、高圧洗浄、避難所の運営・管理、支援物資の管理、炊き出しの協力、足湯ボランティア、マッサージボランティア、チェーンソーボランティアなどが大活躍。県内の社協からも続々応援に駆けつけていただき、社協という大きな組織のありがたさを再確認すると同時に、情報共有の大切さを痛感した災害でした。

災害ボラコの成功は日頃からの「顔が見える関係性」づくり

今回、災害ボラコの活躍が成功したひとつには各地区の防災訓練や学校への福祉教育によって、ボラコの存在や「顔が見える関係性」を築いていたことが機能したことです。互いに顔を知っている人だったからこそ、ニーズをスムーズに引き出せたとも考えています。

また、さらに大きな災害が起こった場合を想定し、準備をしておかなければならないことも明らかになりました。

今後も災害ボラコを養成し、人数を増やしていくことや、自主防災組織等との一層の連携、減災への啓発なども今まで以上に力を入れていきたいです。

〈取材日:平成24年6月27日〉

ボランティア活動

読者の広場

平成24年になってから自動車が関係するいたましい事故が多発しました。公私ともに自動車を運転する機会が多いですし、安全運転の必要性を痛感しました。（新潟県　宮崎さん）